

乳幼児期の「笑い」の発達過程 ：エピソード分類による手法を用いた検討

村上 太郎

九州女子大学 人間科学部 人間発達学科 人間発達学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

要 旨

本研究は、「ユーモア」そして「笑う」という視点からみた乳幼児期の社会的相互作用の発達の変化について検討することを第一の目的とし、子どもはどのような時に笑顔を表出するのか、そして子どもはいつから他者を（意図的に）「笑わせる」のか、の2点について検討を行った。また、第二の目的として、笑顔を対象とした発達研究の方法論について検討を行った。0歳から6歳までの子どもの笑顔に関するエピソード記述（述べ588エピソード）を収集・分類した。その結果、加齢に伴って社会的相互作用場面における笑顔が多く生起するという発達の変化が示唆された。また、他者を「笑わせる」行動について検討を行った結果、1歳後半から2歳の時期から他者を笑わせはじめることが示唆された。

1 問題と目的

ヒトは笑う。可笑しいとき、楽しいとき、嬉しいとき、他者とすれ違いざまに挨拶をかわすとき、など。笑顔そして笑いは意識的にも無意識的にも我々の日常にあふれている。そのような笑顔の中でも、乳児や幼児の笑顔は、周囲の大人の養育心をかき立てたり心をなごませたりする機能をもっていることは、多くの人にとって経験的に容易に理解されることであろう。

笑顔は、その発生起源や機能に関して、ヒトの乳児や霊長類を対象として発達心理学、進化心理学的な視点から検討がなされつつある。笑顔の進化的起源としては、ニホンザルの新生児においても自発的微笑がみられるという報告（Kawakami, Tomonaga, & Suzuki, 2016）もあり、霊長類とヒトとの何らかの進化的連続性が示唆されている。生後間もない時期にみられる自発的微笑（生理的微笑）は、ヒトにおいては養育者の育児に対する態度を変化させるために存在するという説があるが、ニホンザルにみられる笑顔は自発的微笑の形とは異なるため、ニホンザルにおける自発的微笑は親個体の養育行動を引き出す機能は有しないという議論もある（Kawakami et al., 2016）。これらの議論は、笑顔に関するヒト特有の特徴への議論の広がり性を示唆するが、笑顔の発生起源に関しては、比較行動学などの今後の研究によって解明されていくことが期待される。

生後2、3ヶ月頃になると、他者に対して見せる社会的微笑がみられるようになり、子どもは他者との関わりの中に参入して応答的に笑顔を表出するようになる。さらに、生後9ヶ月頃から「自己-対象-他者」といった三項関係的コミュニケーションの世界で、他者と対象や出来事を共有し、他者が笑うから自分も笑う、子どもが笑っているから大人も笑う、という双方向的な関係がより強くなっていく、といった生後1～2年目における乳児期の笑顔の発達過程については徐々に明らかになってきている。

乳幼児期における「笑い」を対象とした研究はこれまでもいくらかみうけられる。友定(1992)は、1歳児と2歳児を対象に参与観察を行い、2歳児になると他者との関係で笑いを能動的に使用するようになることを示している。1歳児の主に外界を受け止めることに使用されている段階から、2歳児になると「わかる」こと、概念の「ズレ」に基づくおかしきについての理解を示すようになるという発達過程の示唆は興味深いものである。栗林・岩立(2015)は2歳児を対象にユーモア行動の表出とその共有過程について検討を行っている。その結果、「無意図なもの」、「偶然的なもの」の繰り返しによってユーモア表出が増えてくること、自分にとって「面白い」と思うことを他者と共有しようとするが、必ずしも他者が「面白い」と思うことを理解しているわけではないこと、という他者との相互作用場面においてユーモアが生成され表出されるという2歳児の特徴について論じている。

また、幼児期の笑いを対象とした研究には、子どもが生活する場面における、コミュニケーション上の機能を有した笑いに焦点を当てたものがある。伊藤・内藤・本多(2009)は、幼児(年少児から年長児)の攻撃行動に伴う笑いを攻撃的笑いとし、行動観察から親和性と攻撃性といった2つの性質が幼児期のコミュニケーション場面においてみられることを示した。

しかしながら、「笑い」を取り上げた発達研究にはまだ多くの蓄積があるとは言えない。それは、「笑い」という行為をどのように捉えるのかが難しいからである。日本語の「笑い」は、心理・社会的な意味を持つ種々の行動を示す語群の構成要素として、幅広い意味を担う言葉として使われている(雨宮, 2016)。この幅広い「笑い」を対象とする研究の中でも焦点が当てられてきたものは「ユーモア」である。ユーモアとは一般的には「滑稽な、あるいはばかげた不適合な考え、事象、状況を発見し、おもしろいと思う心的経験」のことを指す(McGhee, 1979)。ユーモア研究で著名なMcGhee(1979)は、ユーモアを2つの特徴から定義づけている。1つ目は、相対的にまじめなものであり、既存の知識を拡大しようという強い欲求によって特徴づけられるもの。2つ目は、まじめな意図は欠如していて、あり得ないとか見込みがないと分かっている事象や関係を、空想のなかであれこれ考えて遊ぶという特徴をもつもの、である。McGheeのユーモア理論の特徴は、ユーモアを経験・体験レベルではなく、知的な遊びの一形態として位置づけたところにある。つまり、ユーモアは認知的な活動として捉えられ、ユーモアを理解するということは、見せかけの理解などの認知

能力の発達が前提となっている。それゆえ、従来のユーモア研究ではジョーク刺激を提示し、可笑しみの評定をしたり、笑顔を記録したり、というように、可笑しみや笑いをもつばらユーモア刺激に対する反応として位置づけた研究方法がとられてきた。また、発達の観点からはMcGheeはユーモアとしては動作には着目せず、言語的なユーモアを重視した。そのため、McGheeの主張をふまえると、言語的ユーモアとして最初に現れるのは生後18ヶ月ほどにならないと現れないと考えられる。

その一方で、言語ではなく、社会的相互作用のなかにある動作として「笑い」に着目するべきであるという主張もある (Reddy, 2008)。この主張は、出来事のズレや奇妙さを可笑しきさとして経験するために必要なのは、見せかけやふりの理解といった認知能力ではなく、シリアスと対比される遊戯性の理解であるとする。笑いがプレイ・シグナルとして機能することで状況の遊戯性が受け手に検出 (理解) されることが重要であるとするこの主張は、刺激に対する反応としての笑いではなく、働きかけの側面を重視しているとも言える (雨宮, 2016)。この主張に立つと、遊戯性の理解は、生後4ヶ月になれば可能だと考えられ、インタラクションにおけるユーモアの発達を考える上で重要な視点であると言える (Reddy, 2008)。

ユーモアの発達に関して、上記の2つの主張は異なっているようにみえるが、双方の主張に共通する重要な要素としては、不整合 (incongruity) という概念が挙げられる。不整合とは、「対照的な、もしくは矛盾していること」を指し、「間違いをおかすとか、場違いなこととか、柄にもないことをするといったことであり、2つのものを並置したものがほんとうには一緒にならないことであり、異常もしくは奇妙で、普通であるとか予期した通りであることとは鋭く対照を為すもの」(Reddy, 2008) と捉えられている。それでは、ユーモアはどのように理解されるようになるのであろうか。標準的な認知的表象による説明に基づく、ユーモアを知覚するために重要なことは、まず1つ目は個人が不整合を知覚できることであるとされている。それは、予期されたことと“普通ではないこと”との間の対照を知覚する能力であり、それは子どものなかにある種々の概念、ふつうらしさの範囲、予期されることの範囲が存在し、子どもの目の前で起こった出来事を子どもが持つ概念や予期に照らして判断され想定される必要があるということである。2つ目は、その不整合をおもしろいと解釈できることである。乳児の認知発達に関する研究は、生後半年までの間に対象の永続性の理解 (Baillargeon & Graber, 1987)、足し算の理解 (Wynn, 1992) など、乳児は現実の世界についての物理的な知識を有し、また出来事についての予期を有していることを示してきた。しかし、ユーモアを知覚するためには、不整合の検出のみならず、その不整合をおもしろいこととして解釈する能力が必要であると考えられる。そのため、McGhee (1979) は18ヶ月より前の赤ちゃんはユーモアを経験することができないと論じている。

McGhee (1979) に代表されるような認知的活動を重視する立場の研究は「赤ちゃんが

何について笑うか」に重きを置いている一方、Reddy (2008) は、「赤ちゃんが何について笑うか」に加えて「赤ちゃんが他者を笑わせるために何をするか」の双方を検討することが重要であると提案している。「他者を笑わせる」ということは、自分が楽しむためのユーモア(遊び)だけではなく、他者の心の状態を操作する、他者の予測を裏切る(かつ、それを楽しんでくれるという期待を持っている)という社会一語用論的な社会的認知能力に支えられた行動であると考えられる。不整合を知覚するということは、現実についての表象と自己がもつ表象とのズレを理解することであり、状況によっては、他者がもつ表象と自己がもつ表象とのズレを理解することであるとも言える。それゆえ、コミュニケーション場面における笑いに焦点を当てた発達研究は、他者理解・他者意図理解の枠組みを広げうるものであると言える。他者の心的状態への気づきと、それをふまえた子どもからのコミュニケーション的な働きかけについて検討することは、これまでなされてきた「他者の心を理解する心」の発達研究の流れに重要かつ新しい示唆を与えるものであると考えられる。しかしながら、乳幼児を通して笑いを可能にする心の発達過程についてはまだ明らかになっていない点が多い。

それゆえ本研究は、乳幼児期における対人的なコミュニケーションを可能にする心の発達について検討していくために、2つの目的を設定する。まず、子どもの笑顔に関するエピソード記述を基に、「笑う」という視点からみた乳幼児期の社会的相互作用の発達過程について検討することを第一の目的とする。具体的には、①子どもはどのような時に笑顔を表出するのか、②子どもはいつから他者を(意図的に)「笑わせる」のか、の2点について検討を行う。また、笑顔を対象とした発達研究の方法論はまだ確立していないことから、方法論としての有用性について検討を行うことを第二の目的とする。

II 方法

大学1年生が主な受講者である演習の授業において、受講している学生(計82名)から「子どもの笑顔に関するエピソード」を収集した。収集方法は、学生自身が子どもの笑いを観察し、エピソードとして記録する、もしくは学生を通して知人(きょうだい・親戚・友人)の子どもについてのエピソードとして収集した。エピソードの対象としては、子どもが遊んで笑顔や笑いを表出している場面を参与観察的に写真や動画に収めたものを主とするが、日常場面で保護者や学生が子どもの写真を撮る時(「はい、ポーズ」等の、撮影に対する構えを作らせる状況も含む)に子どもが撮影者(またはカメラなど)に対して笑顔や笑いを表出したものも対象とした。

エピソード収集に際しては、笑顔が表出された(写真や動画に収めた)場面には、子どもの他に誰がいたか、どのようなことをしている状況だったか、そして笑顔の表出に至るまでの様子について学生に記述を求め、写真または動画にエピソード記述を併せて収集する、もしくは写真や動画に収めることができなかった場合は、文章によるエピソード記述として収

集した。

なお、エピソード収集の際、①エピソードは授業の教材として用いること、②名前はインシヤル表記にして個人情報の保護に努めるが月齢や性別の情報は使用させてもらうこと、の2点について保護者の同意を得た場合にのみエピソードとして収集することとした。収集されたエピソード数は延べ588であった。

コーディング

第一段階として、収集したエピソードを以下の5つのカテゴリーに分類した。分類方法については先行研究がなかったため、本研究では収集されたエピソードに対して独自の分類基準を定めて分類した。分類基準は以下の通りである。

1. 感覚・身体遊び：くすぐり、高い高い、イナイナイバーといった、他者（大人）が子どもに対して感覚的、身体的に働きかける場面でみられた笑顔。
2. 一人で笑う・一人遊び：一人である、つまり他者との相互作用が生じていない状況であるにもかかわらず笑顔を表出する、もしくは一人遊びをしているときに笑顔になる（その笑顔は他者に向けられたものではない）。
3. 話しかけ（声かけ）に対する反応：マザリーズのような話しかけや、子どもの名前を呼ぶなど、他者（大人）が子どもに対して言語的に働きかけたときにみられた笑顔。
4. 社会相互的な反応：他者と対象を共有するような三項関係的コミュニケーション（共同注意）場面や他者と一緒に遊んでいる場面、といった子どもと他者が双方向的に関わり合っている場面においてみられた笑顔。
5. その他：上記4つのカテゴリーに該当しなかったエピソード。

さらに、「4. 社会相互的な反応」に関して、どのような状況（内容）で笑顔が生起するのかを詳細に検討する必要があると考えたため、「社会相互的な反応」に分類されたエピソードを10の下位カテゴリーに分類した。分類項目と基準は以下の通りである。

- 1) 共同注意的コミュニケーション（他者・他児との遊び）：他者と一緒に遊んでいる場面においてみられた笑顔。
- 2) 提示・見せびらかし：自分が持っているモノや着ている服などを他者に見せようとしているときにみられた笑顔。
- 3) マネ・フリ・ごっこ遊び：1)「共同注意的コミュニケーション」の中でも、マネやフリといった模倣行動をしている際にみられた笑顔。
- 4) 照れ笑い：エピソード記述において、子どもが照れながら笑顔が表出された場合。
- 5) おどけ：他者に対しておどけるような行動をとりながら笑顔が表出された場合。
- 6) 他者から笑われて笑う：他者（大人）が笑っている状況で、それにつられて子どもも

笑った場合。

7) 変さ（不整合）に対して笑う：子どもが変さ（不整合）を知覚し、それに対する反応としてみられた笑顔。

8) カメラを見て笑顔を示す：カメラを見て、カメラ（を持っている人）に対して笑顔を表出した場合。

9) カメラに対してポーズをとる：写真を撮る時に子どもがポーズを取りながら笑顔を表出した場合。

10) カメラ回避：カメラを向けられた時、撮られるのを回避するような行動がみられた場合。これらの主な5カテゴリーと「4. 社会相互的な反応」の10の下位カテゴリーを用いて2名による評定を行った。その結果、評定者間一致率を示すκ係数は0.55という中程度の一致率であった。

III 結果

1. エピソードの分布

年齢ごとにエピソードを分類し（表1）、分類項目（1～5）×年齢群（6水準）で χ^2 検定を行った結果、有意差がみられた（ $\chi^2(24) = 185.59, p < .01$ ）。残差分析の結果、0歳児群においては「1. くすぐり・イナイナイバー・身体遊び」と「3. 話しかけ（声かけ）に対する反応」に分類されたエピソードが有意に多い一方で、「2. 一人遊び・一人で笑っている」「4. 社会相互的な反応」に分類されたエピソードは有意に少ないことが示された（ $ps < .05$ ）。1歳児群においては「2. 一人遊び・一人で笑っている」に分類されたエピソードが有意に多い一方で、「4. 社会相互的な反応」は有意に少ないことが示された（ $ps < .05$ ）。2歳児群においては「1. くすぐり・イナイナイバー・身体遊び」に分類されたエピソードのみが有意に少ないことが示された（ $p < .05$ ）。3歳児群においては「4. 社会相互的な反応」に分類されたエピソードが多い一方で「1. くすぐり・イナイナイバー・身体遊び」と「3. 話しかけ（声かけ）に対する反応」に分類されたエピソードが有意に少ないことが示された（ $ps < .05$ ）。4歳児群においては「4. 社会相互的な反応」に分類されたエピソードが多いことが示された（ $p < .05$ ）。5歳児群においては3歳児群と同様に「4. 社会相互的な反応」に分類されたエピソードが多い一方で「1. くすぐり・イナイナイバー・身体遊び」と「3. 話しかけ（声かけ）に対する反応」に分類されたエピソードが有意に少ないことが示された（ $ps < .05$ ）。6歳児群においては有意な偏りはみられなかった。

表1. 各年齢におけるエピソード分類の結果

延べエピソード数	0歳 149	1歳 137	2歳 96	3歳 99	4歳 45	5歳 36	6歳 27
1. くすぐり・イナイナイバー・ 身体遊び(高い高いなど含む)	41 (28%) ▲	10 (7%)	4 (4%) ▽	1 (1%) ▽	1 (2%)	0 (0%) ▽	1 (4%)
2. 一人遊び、一人で笑っている (モノに対する笑顔表出も含む)	12 (8%) ▽	33 (24%) ▲	16 (17%)	11 (11%)	4 (9%)	4 (11%)	5 (19%)
3. 話しかけ(声かけ)に対する反応	54 (36%) ▲	25 (18%)	12 (13%)	6 (6%) ▽	5 (11%)	2 (6%) ▽	3 (11%)
4. 社会相互的な反応 ※1)~10)の合 計	27 (18%) ▽	54 (39%) ▽	53 (55%)	73 (74%) ▲	34 (76%) ▲	25 (69%) ▲	16 (59%) ▲
5. その他	15 (10%)	15 (11%)	11 (11%)	8 (8%)	1 (2%)	5 (14%)	2 (7%)

※括弧内は、各年齢の延べエピソード数に対する該当エピソード数の割合。

また、 χ^2 検定の結果として、▲：有意に多い、▽：有意に少ない($p < .05$)を示す。

次に、「4. 社会相互的な反応」の下位カテゴリーとして設定された10のカテゴリーについて検討を行った(表2)。なお、今回のデータは統計的検定に耐えるデータ数ではないため、単純集計に基づく検討とする。

まず、年齢によってエピソード数(割合)に違いがみられるカテゴリーについて記述する。「1) 共同注意的コミュニケーション」は、特に0歳児(月齢としては生後1年目後半のものが多い)における割合が高く、また他の年齢群においてもある程度の割合で分類されることが分かる。「2) 提示・見せびらかし」は2歳児以降に現れており、「3) マネ・フリ・ごっこ遊び」は1歳から3歳の時期にわずかながら報告されている。「5) おどけ」は0歳児から1歳児において20%前後の分類がみられ、それ以降はわずかながら報告されている。また、「8) カメラを見て笑顔を示す」は0歳児に多く、「9) カメラに対してポーズをとる」は1歳以降20~50%弱の範囲で推移しており、とりわけ2歳児以降は9)に分類されるエピソードが多いことがうかがえる。さらに「10) カメラ回避」は4歳以降に少ないながらもみられるようになった。

一方で、今回の調査で年齢によってエピソード数(割合)に違いがみうけられなかったものは、「4) 照れ笑い」「6) 他者から笑われて笑う」「7) 変さ(不整合)に対して笑う」であった。

表2. 各年齢における「社会的相互作用」の下位カテゴリー分類の結果

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
1)~10)の合計エピソード数	27	54	53	73	34	25	16
1) 共同注意的コミュニケーション (他児・他者との遊び)	13 (48%)	17 (31%)	9 (17%)	18 (25%)	11 (32%)	8 (32%)	3 (19%)
2) 提示・見せびらかし	0 (0%)	2 (4%)	7 (13%)	11 (15%)	2 (6%)	5 (20%)	2 (13%)
3) マネ・フリ・ごっこ遊び	0 (0%)	6 (11%)	4 (8%)	5 (7%)	1 (3%)	0 (0%)	1 (6%)
4) 照れ笑い	0 (0%)	0 (0%)	1 (2%)	1 (1%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)
5) おどけ	5 (19%)	13 (24%)	4 (8%)	10 (14%)	3 (9%)	1 (4%)	2 (13%)
6) 他者から笑われて笑う	0 (0%)	1 (2%)	1 (2%)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)
7) 変さ(不整合)に対して笑う	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (3%)	2 (8%)	0 (0%)
8) カメラを見て笑顔を示す	9 (33%)	5 (9%)	2 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
9) カメラに対してポーズをとる	0 (0%)	10 (19%)	25 (47%)	28 (38%)	11 (32%)	7 (28%)	7 (44%)
10) カメラ回避	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (6%)	2 (8%)	1 (6%)

※括弧内は、各年齢の延べエピソード数に対する該当エピソード数の割合。

2. 「おどける」エピソードについて

子どもはいつから他者を「笑わせる」という視点から検討を行うため、収集したエピソードの中から子どもが「おどける」エピソードとみられるものを抽出した。エピソードの一部をまとめたものを表3に示す。なお、子どもはカメラに対して様々な表情や行動を取っているものの、今回の分析では、4-8)「カメラを見て笑顔を示す」、4-9)「カメラに対してポーズをとる」といった分類基準と「おどけ」の区別を試みた。具体的には、エピソードを検討した結果カメラの有無にかかわらず生起する他者を笑わせるような行動は「おどけ」として分類し、一般的に「はい、ポーズ」といって写真を撮る際にみられる表情や行動は4-8)または4-9)に分類した。

その結果、まず「かくれんぼ」遊びのような行動が0歳児からすでにみられていることがうかがえる(0歳の1), 2), 1歳の2), 5), 2歳の3))。次に、「おかしな表情をする」という行動がみられた(1歳の1), 5歳の1), 6歳の2))。その他には、通常は隠れている身体の部分を見せたり(1歳の4))、他者の反応をみながら大人から「汚い」と言われそうな行為を行ったりするエピソード(1歳の6), 2歳の1), 3歳の2), 6歳の1))がみうけられた。

IV 考察

1. エピソードの分布について

年齢ごとにエピソードを分類した結果、0歳児はプレイフルな身体接触や声かけに対して笑顔を表出するエピソードが多いこと、1歳児は一人遊びやモノを操作しているときに笑顔

表3. 「おどけ」エピソード

0歳	1) カーテンに隠れて遊んでいて、母親が呼んだら顔を出して笑っている(7ヶ月, 女児) 2) 机の下でハイハイしていて、名前を呼ぶと母親のときだけ顔を出して笑う(7ヶ月, 男児) 3) 口で泡をつくるのにハマっており、その行動に対して家族が時々「わあっ！」と言うと、それを見て笑う(11ヶ月, 男児)
1歳	1) ベーっと舌を出す(1歳3ヶ月, 女児) 2) カーテンに隠れて遊ぶ(1歳2ヶ月, 男児) 3) 洗濯機に入っているところに、「回しちゃうぞー」と言ったら何故か喜んで笑った(1歳3ヶ月, 女児) 4) 家族の注目を浴びると、Tシャツをめくってお腹を出し、笑いながら叩く(1歳6ヶ月頃, 男児) 5) 椅子の下に隠れていて、見つかると嬉しそうに笑っていた(1歳5ヶ月, 男児) 6) コップでお茶を飲むとき、ぶくぶく音を立てて、母親の反応をうかがう(1歳11ヶ月, 女児) 7) 飲食店に行き、「イェーイ」という言葉にハマってご機嫌。最後は怒られてしまう(1歳11ヶ月, 女児) 8) 扇風機に向かって「あーっ」と言っている(1歳7ヶ月, 女児) 9) 母親の顔を叩きながら凄く上機嫌になっている(1歳11ヶ月, 女児) 10) お姉ちゃんの靴を履いて嬉しそうにニコニコしていた(1歳8ヶ月, 男児)
2歳	1) 鼻をほじっていて、近くにいた大人が「あーっ」と言うのと笑う(2歳7ヶ月, 女児) 2) 子供用の車で父親にぶつかった時、「いてっ」と父親が言うと、その後「いてっ」と自分で言いながら笑いを誘う(2歳2ヶ月, 男児) 3) 座っているお父さんの近くの看板に隠れ、「おーい」と呼んで隠れ、お父さんが探しくると笑っていた(2歳, 男児)
3歳	1) ソファに座っていて足元に母親の頭があることに気づくと、足で何度かつつく(3歳3ヶ月, 女児) 2) 母親が洗濯物をたたんでいる横でパンツをかぶって笑っている(3歳10ヶ月, 男児) 3) [飲食店の] 柵の隙間から手を出したり[観察者の方を] 覗いたりしてきたので「どうしたー？」と言いながら近づいたら、ケラケラ笑いながら隙間から離れて椅子の上で飛び跳ねていた(3歳, 男児) 4) [観察者が] 飼っている猫に額をペシペシ叩いて笑っていた。怒られたらさらに楽しそうに笑っていた(3歳, 女の子)
4歳	1) 携帯のカメラを向けると近づいてきてイーッと笑顔を見せる(4歳, 男児) 2) お母さんと男の子が一緒におばあちゃんへの誕生日ケーキを選んでいて。選び終わってケーキの会計をしている時、S君がいきなり笑いながら「ハッピーバースデーおじいちゃん」と歌いだした。お母さんが「おじいちゃんやない！おばあちゃん！」と素早くつつこんでいたが、S君は笑いながらまた「ハッピーバースデー...」と歌っていた(4歳6ヶ月, 男児)
5歳	1) 抜けた前歯を見せて〜って言ったら、いじわるして笑顔で隠した(5歳, 男児)
6歳	1) 作りげっぷをして怒られながらも、それが面白くて笑っている(6歳1ヶ月, 男児) 2) カメラを向けると変顔をしてきた(6歳, 男児)

※エピソードの記述は、必要に応じて著者が表現を一部修正した。また、[]内は著者による補足である。

を表出するエピソードが多いことが示された。そして3歳児以降は社会相互作用的な場面における笑顔のエピソードが多い一方で、0歳児で多くみられたプレイフルな身体接触や声かけに対する笑顔のエピソードは減少していることが示された。

この結果は、子どもはどのような時に笑顔を表出するのか、という問いに対して、遊びや関わりが発達の変化を示唆するものであると言える。生後1年目の後半から共同注意行動が多くみられるようになると「自己-対象(他者)」といった二項関係から「自己-対象-他者」

といった三項関係的コミュニケーションの世界に子どもは参入していく。それに伴い、他者からの働きかけに反応して笑顔を示すことが多かった0歳前半～半ばの時期から、他者やモノに対して働きかけることが0歳後半～1歳の時期に多くなるという発達的变化に沿った結果であると言える。2歳児群においては、分類されたエピソードに有意な偏りはほとんどみられなかった。これは1歳児における「一人遊び、一人で笑っている」ことが多い時期から3歳児における「社会相互的な反応」が多くなる時期への移行期として、双方の行動が生起しやすい時期であるためと考えられる。3歳以降では、「社会的相互作用」に関するエピソードが多く報告された。これは、対人的なコミュニケーション能力の発達にともなう対人関係の広がりによるものであると考えられる。

笑いの発達に関するこれまでの研究は、保育園や幼稚園における観察による検討が主であった(友定, 1992; 栗林・岩立, 2015; 伊藤ら, 2009)。当然のことながら、子どもが実際に遊んでいる場面を観察しながら、詳細な文脈を記述し検討していくことは必要である。その一方で、笑顔表出時のエピソード・データを数多く収集し検討するという手法を用いた今回の結果においても、発達的变化が示唆されたことは方法論の構築と言う点において意義のあることだと言える。

2. 「おどける」エピソードについて

おどける、つまり他者から笑いを引き出すために行う赤ちゃんの行為に関してはReddy (2008) が典型的な行為を整理している。その中では、赤ちゃんの「おどけ」として、奇妙な身体の動き、おかしい表情、奇妙で大きな音、大げさな行為、ばかげたことをする、通常は隠れている身体の部分を見せる、規範を破る、他者の構成物を乱す、人の奇妙な行為をまねする、奇妙な格好をする、子どもじみた退行したことをする、とった行為が挙げられている。本研究で得られたエピソードを検討した結果、0歳児からでもかくれんぼのような遊びを行い、笑うということがうかがえた。これらの行動は上述のReddy (2008) による典型的小おどけの行為に含まれるものではない。しかし、いわゆる「かくれんぼ」といった「探す人-探される人」の双方がルールを守って遊ぶというものではないものの、子どもにとって他者が見えたり見えなかったりするところで他者の反応をうかがいながら他者に働きかけようとする行動として捉えられる。それゆえ、これらは他者から笑いを引き出すための赤ちゃんの積極的な行為として考えられ、単にユーモアを知覚するだけではない、「ユーモアを作り出す」赤ちゃん (Reddy, 2008) という見方を支持するものであると考えられる。

その他、「おかしい表情をする」「通常は隠れている身体の部分を見せる」「他者の反応をみながら大人から「汚い」と言われそうな行為をする」といった行動が1歳からすでにみられていることが示唆された。これらの行動は幼児の「道化的な行動」(Reddy, 2008; 雨宮, 2016) として捉えることができる。道化的な行動について、赤ちゃんは、はじめはこれら

の行為が規範をどの程度深刻に違反しているかや、行為が他者をおかしがらせているかについてはほんの少ししか理解していないものの、自身の行為（違反している事実）が他者の笑いと結びついていることを理解していく（Reddy, 2008）。このように、社会相互作用において不整合を生じさせる乳幼児のふるまいは、言語的・非言語的にかかわらず、他者の情動的な応答に影響を与えることができる能力の存在を示唆するものであり、この能力は発達の早い時期から有していることが考えられる。

その一方で、子どもはいつから他者を「(意図的に)笑わせる」か、という問いに対しては「おどけ」の発達とは異なる考察が必要であると考えられる。というのも、他者を「笑わせる」ためには、コミュニケーションの文脈において、他者の情動認知や意図的なズレを作り出すといった認知能力の発達が不可欠だからである。自分が楽しむためのユーモアではなく、他者の心の状態を操作する、他者の予測を裏切るという社会的認知能力に支えられた行動という観点から「笑わせる」行動を捉えたとき、本研究で収集された「おどけ」エピソードからは、1歳の6)や2歳の2)にその初出を求めることができるであろう。それゆえ、意図的に他者を笑わせる能力は、1歳後半から2歳の間に発達してくる可能性が示唆される。

3. カメラに対する行動について

その他にも、カメラを見て笑顔を示す、カメラに対してポーズをとる、カメラ回避といった行動についてのエピソードが収集された。本研究は、子どもの笑いを写真や動画におさめる時を対象としたため、(携帯電話やスマートフォンのカメラを含む)カメラ撮影時の子どもの反応に関するエピソードが多く集められたのはある意味当然の結果であると言える。特に1歳後半から2歳くらいでカメラに対してポーズをとることが増える(できるようになる)というエピソードが多くみられる結果となった。このような結果が示された原因としては、社会-文化的な要因が考えられる。カメラを見て笑顔を示すという子どもの行動は、カメラそのものに対して引き起こされるわけではない。カメラ越しに見る他者の笑顔に感化されて子どもも笑い、その子どもの笑顔に対して大人も笑顔を返したり「かわいい～」などのポジティブなフィードバックを与えたりする。これらの相互作用を通して、子どもがカメラを見るということと、笑顔を表出するという行動との関連づけが強化されている可能性が考えられる。この点については、本研究の方向性とは若干異なるものの、カメラに対してポーズを取るという経験的(文化的)行動が形成されるのは1歳後半から2歳の時期であることが示唆された。

4. 方法論についての検討

1) データ収集の方法について

今回は、エピソード収集の方法として、個人的に収集する、もしくは知人を伝ってエピソード

ードを収集するという方法を取った。そのため、園などにおける参与観察と比べると幅広い年齢群で数多くのエピソードを収集することができ、大量のデータを収集する効率性という点においては今回の方法は有効であると言える。その一方で、エピソードの質的な側面に関して方法論的な課題がみられた。エピソード記述にあたっては記述する観点や要項（事実関係）を指定していたため、ある程度の様子は読み取ることができる。しかし、その状況における相互作用の情報については十分とは言えないエピソードもいくらかみうけられた。笑いや笑顔が生起する状況の事実関係の記述を簡便に行えるようなエピソード収集の方法を検討することが必要である。

2) カテゴリー分類・評定について

本研究における評定者間一致率を示す κ 係数は0.55という中程度の一致率であった。一致率があまり高くなかった原因として、分類カテゴリー数の多さが考えられる。単純一致率を年齢群ごとに見ていくと、0歳児の単純一致率は75%程度であった一方で、1歳児以上は50～60%程度であった。特に、「4. 社会的相互作用」における評定は他の分類群と比べるとバラつきが多い印象をうけた。これは、分類カテゴリー数が多く、記述されたエピソードの読み取り方、そして評定者間の分類過程に幅があったためと考えられる。言い換えると、1歳児以降における社会的相互作用のレパトリーの多様性が反映されていると考えられるが、今後はこれらの評定を適切に行える分類カテゴリーの設定が必要である。

3) smileとlaughterとの区別について

笑いの効果やコミュニケーション場面における機能を考えていく上で重要なことは、smile（発声を伴わない笑顔）とlaughter（声を上げて笑う）との区別をすることである、という指摘もある。高木（2003）は、3歳から5歳の幼児の遊び場면을観察し、smileとlaughterの発達の検討を行っている。高木（2003）の研究では、幼児期を通して年齢があがるにつれ、遊具などの遊び方が変わるのに伴って笑いの出現頻度が変わっていくことが示唆されているものの、smileとlaughterの出現頻度に発達の差はみられていないことが報告されている。しかし、場面による表出形態の違いとしては、社会的挨拶や達成という状況においてはsmileが多く出現し、laughterは社会的遊びと感覚に付随して表出されることが示された。このことは、コミュニケーション場面において表出の形態を子どもが調整しているということを示唆している。本研究では、エピソードを検討する際、smileとlaughterとの区別をすることができなかったが、今後はエピソード記述の段階で両者の区別を行っていくことも必要であると考えられる。

5. 本研究の課題と今後の展望

本研究は笑いの場面を取り上げることで、乳幼児期の相互作用場面における笑いの発達過程についての示唆を得ることができた。その一方で、コミュニケーション的な笑いや複雑な情動

価をもつ笑い、例えば嘲笑や他者への攻撃行動に伴う攻撃的な笑い（伊藤ら, 2009）などはエピソードとしてほとんど収集されなかった。これは、対大人コミュニケーション場面におけるエピソードが主に収集された結果であり、子どもにとっては安心して遊べる場面、安心して表出ができる場面という、データ収集上のバイアスが生じている可能性も大いに考えられる。できるだけ様々な場面における子どもの笑顔の表出を捉えること、そして子どもが示す笑顔や笑いのコミュニケーション的な機能、心の発達過程を明らかにできるような方法論の構築が今後必要であると考えられる。

謝辞

エピソード集めに協力してくれた学生のみなさん、そしてエピソードの提供にご協力いただいた保護者のみなさまに厚く御礼申し上げます。なお、本研究のデータは、大城千夏さんの卒業論文の一部を、著者が再分析、加筆したものです。データ整理やエピソード検討を一緒に行っていただいたこと、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 雨宮俊彦 (2016). 笑いとユーモアの心理学—何が可笑しいの?—. ミネルヴァ書房.
- Baillargeon, R. & Graber, M. (1987). Where's the rabbit? 5.5 month-old infants' representation of the height of a hidden object. *Cognitive development*, 2, 375-392.
- Kawakami, F., Tomonaga, M. & Suzuki, J. (2016). The first smile: spontaneous smiles in newborn Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *Primates*, doi: 10.1007/s10329-016-0558-7.
- 栗林万葉・岩立京子 (2015). 2歳児のユーモア行動の表出と共有過程. *東京学芸大学紀要*, 66 (1), 181-197.
- 伊藤理絵・内藤俊史・本多薫 (2009). 幼児に見られる攻撃的笑いについて—観察記録からの検討—. *笑い学研究*, 16, 114-118.
- McGhee, P. E. (1979). *Humor: Its origin and development*. W. H. Freeman and Company. 島津一夫 (監訳) (1999). 子どものユーモア—その起源と発達—. 誠信書房.
- Reddy, V. (2008). *How infants know minds*. Harvard Univ. Press. 佐伯胖訳 (2015). 驚くべき乳幼児の世界—「二人称的アプローチ」から見えてくること—, ミネルヴァ書房.
- 高木尋子 (2003). 幼児における笑いの発達—SmileとLaughterの違いに着目して—. *人文*, 1, 学習院大学人文学研究所, 113-125.
- 友定啓子 (1992). 乳幼児期における笑いの発達—1歳児から2歳児へ—. *日本家政学会誌*, 43 (8), 735-743.
- Wynn, K. (1992). Addition and subtraction by human infants. *Nature*, 358 (6389), 749-750.

Developmental process of “humor” behavior in childhood : The study using the methodology of episode analysis.

Taro Murakami

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

This study aimed to investigate the developmental change of “humor” and “smile” in social interaction during childhood. Specially, this study focused on when do children express a smile and humor to make other laugh intentionally. Moreover, this study also aimed to establish a methodology that focuses on the development of expression of the smile and the humor. 588 smile episodes were collected and categorized the humor action of 0- to 6-year-olds. The results showed a developmental change that children become to smile or laugh at social interaction with age. And the analysis of humor action suggested that children begin to product humor action around two-year-olds.